

# アフターケア通信

ご本尊を受けとられた貴方へ

ひかくひせん  
非核非戦

【8月号】



毎月9日に勤められる  
「非核非戦定例法要」の様子



## 【非核非戦法要】

—仏さまの願いに会う日

戦争も核も、決して政治家や科学者が引き起こしたものではありません。優劣を付けずにはおれない、また豊かで便利な生活を追い求めずにはおれない、私の心が生み出したものなのです。

「非核非戦」とは、共に生きることが出来ない私たち人間を悲しみ、真の平和を願う仏様の心をあらわす言葉です。それを実現するためには、社会や世界の平和を願う以上に、何より私たち1人ひとりの心が平和でなければなりません。そのことに気づいたとき、「非核非戦」の言葉は仏様の願いから、この私の願いとなるのです。

毎年訪れる原爆の日、終戦の日を大切な機縁として、もう一度共に生きる道、真の平和を実現する道を聞きたずねていきましょう。

## 【原子爆弾災死者収骨所】

—ご存じですか？

長崎市筑後町にある真宗大谷派長崎教務所には、「非核非戦」の文字が刻まれた石碑が建っています。この石碑の下には、原爆で亡くなられた1万體とも2万體ともいわれるお骨が納められています。このお骨は当時引き取り手が見つからず放置されていたもので、それを一つひとつ拾い上げ、ここへ大切に納められました。

現在この長崎教務所では、原爆が投下された毎月9日に「非核非戦定例法要」が勤められています。その際、特に若い世代の僧侶を講師として、原爆や戦争ということを中心に法語を行っています。ご門徒の皆さんもご参詣下さり、この定例法要が貴重な学びの場ともなっています。

## 今月の門徒さん

毎月9日の原爆忌に長崎教務所へお参りするたび、原爆によって命を落とされた方々から、“非核非戦—共に生きよ—”と願われていることの意味を考えると、私たち人間の知恵の間を見せつけられているように感じます。

人として生まれ、聞き難い仏法にご縁をいただいておりますが、身近な家族ともなかなか共に生きられない。そんな私を悲しんでくださっている仏さまのお心に触れ、ようやく身近な人と心が通じ合える世界が開かれる。そんな気がしています。

きたしげこ  
喜多 繁子さん

(第1組・慈光寺)



真宗大谷派 長崎教区教化委員会



# しょうしんげ 「正信偈」とは？

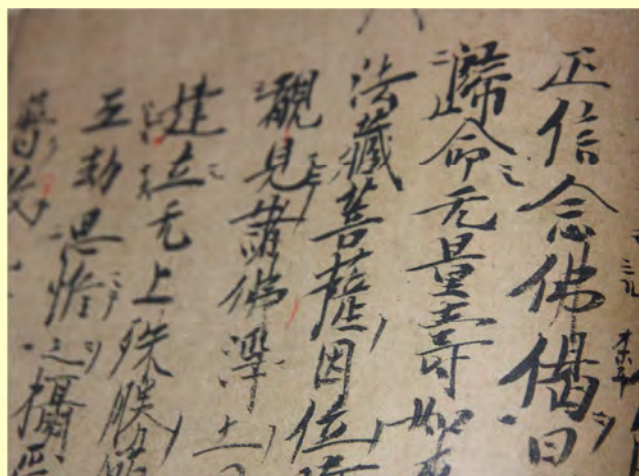
えきょうぶん えしゃくぶん  
“依経分”と“依釈分”



私たち真宗門徒にとって耳慣れたお勤めとして、「正信偈（正信念仏偈）」や和讃  
 があります。正信偈は『仏説阿彌陀經』のようなお経に分類されるものではなく、  
 『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』という、親鸞聖人が著された書物の  
 「行巻」末尾に置かれた、1行2句ずつ、60行120句の漢文形式の偈です。  
 この偈は、大きく「依経分」（赤本13頁「難中之難無過斯」まで）と「依釈分」  
 （赤本14頁「印度西天之論家」から最後まで）の2段に分かれます。依経分は、  
 釈尊が説かれた浄土の成り立ちとその功德を、また、依釈分は、七高僧がそれを  
 承けて自らに証して下さった、念仏往生の道とその利益を簡潔に示しています。

阿彌陀如来の「えらばず、きらわず、見捨てず」という本願のはたらきが、釈  
 迦・七高僧（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空）という教えの伝統  
 を通して、念仏の信心（本願他力を信じる心）となるのです。私たちに弥陀の

救いを信じ念仏申しな  
 がら、人として活  
 きと生きるよう勧め  
 下さっているのが、こ  
 の「正信偈」なのです。



「顕浄土真実教行証文類」影印本  
 （親鸞聖人直筆の写真版）

